書　評

世界海洋探険史 宇田道隆著 B 6　436頁 380円
1955年8月　河出書房刊

昭和16年に科学新書の一冊として刊行になった「海の探究史」は今度面目を全く一新し，内容も旧版の倍以上の大著となって刊行されたことは誠に喜ばしい．

読んでみて旧著にもまして非常に面白い．読み出したらなかなか止められない．その範囲は単に海洋科学に限ることなく，広く水産，海運，航海に及んでいて単に海洋学者の伝記をつづり合わせたようなものではなく，海の現場で仕事をする人の業蹟も十分にとり入れられている．(例えばP.343の相模の漁長橋本常吉氏の伝を見よ) 全体として生き生きしていて，どこか潮の嗅がする．

元来海洋学や気象学は対象が複雑であるから，その研究は紆余曲折して進展してゆくので，近世の物理学史等にみられるようにすっきり体系的に割り切れたものではない．しかし現場の仕事とつながった技術面を持った学問の歴史はすべて複雑した発展のすぢ道を通るのであって，これを無理に体系的にするとかえって嘘のものとなり，実践にはあまり役立たぬ概論風のものとなってしまうのである．本書はこのような点からみるとかなり体系からはみ出した書き方であり，又具体例は各論風にくわしく書かれているが，重要な項目はすべて網羅してあって，成功しているといえよう．だが記載された項目をあとでさがす時に索引がないと大へん不便ではないか．たとえば海上風級をつくったビューフォートのことは第2章や第3章の19世紀の初頭の部分には見られず，第21章の航海，水路，海運の発達史の所の支倉六右衛門のローマ行，海難と救助，とビッヂングトンの海員用暴風法則書，標流物語の項目にはさまれて記載されているから索引がないと大へんさがしにくい．改版の時に索引をつけられるか，或は年表の相当項目に記載のある頁を入れられると読む本としてだけでなく使う本として大へん便利になるのではないだろうか．　(根本順吉)

気候学関係文献抄録　(気候学集報第3号)
気候談話会発行　B 5　71頁 220円　1955年8月

これまでの文献集の続刊として出された第3号で，この号には最近10年間の気候学関係の単行本50冊，1953年に刊行された気候学・気候誌の論文550の紹介がしてある．これまでのように論文の題目だけを並べたものでなく，それぞれ約200字の内容紹介がしてある点が新しい．単行本などで重要なものは数百字の詳しい紹介と批評が付けられてあるとはいえ，論文の方はいささか舌たらずの場合が多く，もう少し結論まで書いたらと思える．しかし，Meteorological Abstracts and Bibliography のような経済的なバックがあっても あの程度だから，貧乏なこの国ではこういう出版は容易でないことと察せられる．したがって内容紹介の基準は，どういう方法で，データはどういうものを使って，どこの場所について，何を研究したか，を主にし，結論や結果の紹介はそれに次いでいる．とられている論文は，気候学〝関係〟と名ずけているだけあって，かなり理論気象学的なものまで含まれており，一方，建築学・農学や生態学的な面まで集められている．雑誌は欧米はもちろん，ソ聯圏や近東・インドなどまで入っている．しかし，言葉の関係で非常にそれらが片寄っている．これは抄録をとる側の組織の問題であろう．とにかく，このような刊行物が続いてゆけば，この方面の研究者には大きな便宜を与えるだろうことは間違いない．　(神山恵三)

Hare, F. K.; **The Restless Almosphere.**
Hutchinson Univ. Library. 1953, 192p. 8s6d net.

気候学の教課書は古くから幾つもあったが，新しい動気候的観点から書かれたものは Haurwity と Austin の"気候学"の他，少し毛色の違った Flohn とか高橋浩一郎のものなど，あまり多くない．まして大学1，2年の教養程度に，やさしく動気候的解説をした書物はいまだお目にかかったことがない．この本は，ハッチンソン大学文庫の地理シリーズの1冊として，モントリオールにあるマクジル大学地理学教授を現在している気候学者ヘアのものした良書である．著者は1919年生れ，英国で大学を出て，空軍気象局の研究部で Durst の下にあり，現職には比較的近年着いたらしいが，アメリカ気象学会のコンベンジャムにも執筆しておりこの方面での最近の活躍は目立っているようである．

内容は大きくみて2部からなる．前半は大気の物理学的説明で，輻射・降水・風の運動などを扱って，実際の大気現象の理解を深めている．後半は気候誌で，気候帯を大循環によって説明し，各洲別位のスケールでそこの気候をじょう乱の性質，頻度とか影響の仕方などによって説明している．とくにこの後半がおもしろい．もちろん，この本の部分部分は，これまでの物理学の，気象学の，気候学の，あるいはまた地理学の教課書に述べられてあったことかも知れない．しかし，このように改めて順序立てられてみると，動気候とはなる程こうみるのかと考えさせられる．この点で気候研究者の一読にも値するし，割合安価だから，入門書として英語の講読をかねた学生の読物としてもすすめられると思う．

(吉野正敏)